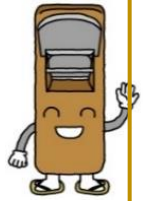


学校問題サポートチームから

これまでの学校訪問や経験から、これはつかえる、やってみたい、いやされるこれやこれっ、などの言葉などを集めてみました。がんばれ学校！

- 前例にとらわれていては何も生まれない。発想の転換と前例を疑うことから始めるべき。
- 学校は校長の夢の大きさを超えることはできない。
- 教師同士の関わる力は、子ども同士の関わる力となる。
- 教育とは、子どもが自ら学び、自ら成長していくことを「邪魔しない」ことである。
- 「ありがとう。」と「ごめんなさい。」は学級経営のはじめの一歩です。
- 今が本番、今日が本番、今年こそが本番、明日がある、明後日があると思っている間は、なんにもありはしない。肝心な今さえないんだから。
- 一番はもちろん尊い、しかし、一番よりも尊いビリだってある。
- 個性を伸ばすことに力を入れず、欠点を直すことに力を入れているのではないか。



- 子どもを変えようと思ったら、まず自分の授業を変えることだ。
- 一人だけわかってもダメ、一人だけわからないのもダメ。
- 学びは子どもたちの発言ではありません。沈黙を味方につけることです。
- 本時のめあてが具体的に示され、振り返りが次の学びに活かされているのだろうか。
- 「はいいいえ」で終わる質問ではなく、気づきを導き、発問で揺さぶり、思考させること。それが授業改善であり、授業力の向上となる。
- ICT活用は目的ではない。子どもたちの学びを深めるためのツールとして扱うべきである。



- 生徒指導とは、生き方指導である。
- 問題が発生した場合、発生が予測されていたか・・・。平素からの取組みが大切である。
- 情報共有のもと、チームによる迅速かつ具体的な対応、関係機関との連携、そして対応の記録を残すことが重要である。
- どのような状況にあっても、学習の保障に努めることが必要となる。
- 取り繕うことなく、素直で謙虚であれ、ミスは認め、子どもを核とした改善策を提示し、時には毅然と対応すべし。
- 少年事件捜査を長く経験したサポートチーム警察OBに相談を！



- 特別支援教育は命の教育、教育の根幹である。
- 特性や愛着の課題は誰にでもあり、行動には必ず意味や理由があり、言葉にならない思いを受け止めることが個に応じた教育である。

- 職場との良い関係を継続するためにも、教職員には療養制度や相談先、講座、リワークなど、活用できるサポート資源の情報を伝えることが大切です。



- 問題が深刻化してからではできることが限られます。「ちょっと気になるな」の段階で、SSWにぜひ相談を！SSWは子ども、教員、保護者を支えるのが務めです！

【「超共感法」のすすめ】

- 役場の窓口で30年、市民の苦情・クレームを聞き続けてきたクレームコンサルタント、山下由美さんが提案する「超共感法」をお勧めします。相手に「そうなんです！」と言わせることで状況を打開するというシンプルな手法です。肯定する言葉を発することで、自然と否定や批判の姿勢が和らぐそうです。

参考文献：山下由美(2019)クレーム対応最強の話し方,ダイヤモンド社

